



一般社団法人 日本庭園協会

東京都新宿区西早稲田 1-6-3 フェリオ西早稲田 301 号
〒169-0051 TEL:03-3204-0595 (FAX 兼用)
E-mail:gsj20@m7.dion.ne.jp URL:https://nitteikyoku.org
発行者: 会長 高橋 康夫
編集者: 広報委員長 小沼 康子
題 字: 上原 敬二
発行日: 2023 (令和 5) 年 10 月 15 日



石燈籠と飛石、苔で構成された「南苑」は、崖下を流れる鯖石川対岸の城山を借景とする
広がりとお興行のある佇まい。2023.10.10 筆者撮影

国指定名勝 貞観園

神田 松太郎
かんだ まつたろう



1950年生まれ。新潟県新潟市南区出身。1981(昭和56)年頃5名の同じ造園業仲間と、同好会「庭研in新潟」をつくり、技術の向上を目指して活動。さらに広く向上するため仲間の修行先の小形研三氏に相談したところ、うつつけの人物がいると紹介をしてくれたのが龍居竹之介先生でした。その後、新潟県支部を立ち上げ、伝統庭園技藝の初め地方開催になりました。

新潟県柏崎市岡野町にある貞観園は、庄屋の居宅である貞観堂を中心にした池泉回遊式庭園です。この地域は積雪が多く、自然落下した雪が軒先まで積もり、それを排除した雪がまた積み重なり高さ七尺位(約2m)の石灯籠が隠れてしまいます。

貞観堂の修復工事を行うことになり、技術指導の庭園部門に

は本部から龍居竹之介・柴田正文、新潟県支部から後藤剛助(当時・支部長)・石川治彦・筆者、建築部門には望月敬生など庭園協会本部及び新潟県支部会員等が多く関わりました。

2005(平成17)年に解体前の実測調査を当支部会員・田中泰阿彌研究会会員合同で行いました。同年に建物解体前に支障になる蹲踞・飛石・軒内の石貼り等の撤去を実施、それに伴う素材の寸法・番号付け・記録などを併せて行いました。この時初めて文化財の解体の知識を少しは得たと思っています。その後、2008(平成20)年に復元工事を当協会会員の方々に協力いただき、完成にこぎつけました。

2010(平成22)年より2014(平成26)年までの5カ年にわたり、貞観園内の茶室、抱月楼・月華亭・環翠軒修復工事の実施に伴う工事と修復周辺の庭園の経年劣化による傷みの修復を継続しました。この工事は庭園に関しては新潟県支部、建物に関しては(有)歴史建築設計研究体(代表望月敬生)が設計監理を行いました。

2015(平成27)年から2019(令和元)年にかけて貞観園の前の道路の向かいにある貞観園内苑(円角庵・玄隆斎・内苑庭園)の保存修理工事を5カ年にわたり継続事業としました。前回同様、庭園は新潟県支部、建物に関しては(有)歴史建築設計研究体(代表望月敬生・望月敬士)が設計監理を行いました。

2004年から13年間、修復工事に関わらせていただきました。龍居先生と貞観園当主・村山義朗様の繋がりで当支部に修復工事の仰せがあったのは、支部会員の人脉の良さだと思っています。修復前の貞観園の庭は自然体の庭という考えで管理されており、自然に芽生えた樹木や大きく成長した低木等が景観を阻害していましたが、徐々に改善しております。

年2回、低木剪定をしており、ドウダンツツジなどのツツジ類は刈込鋏を使用せず木鋏だけで透かし剪定をしています。当主の村山様のご理解と感謝しております。

(正会員)
(当協会会員は敬称略とさせていただきます)

加藤映かとう へい

引き続き、長尾欽弥の別荘、鎌倉山扇湖山荘と唐崎隣松園の庭園について、それぞれの庭園の構成と配置、訪問者のエピソード、そして長尾資料館所蔵の写真を中心に庭園の様子を紹介します。

まず、鎌倉山扇湖山荘です。

別荘鎌倉山扇湖山荘の構成と配置

扇湖山荘は1931（昭和6年）に着工され、1934（昭和9）年に完成しました。鎌倉山の頂上部に位置し、敷地は周囲の山々を含め約

加藤映プロフィール



1955（昭和30）年8月14日、山形県鶴岡市にて出生。4歳時に家族と共に横浜に移り住む。男四人兄弟の三男。昭和

56年横浜市立大学医学部卒業後、麻酔科医としての勤務を経て平成15年横浜市瀬谷区に「かつくりニッパ」開院（令和3年閉院）。趣味はマラソン、釣り、読書、音楽（コントラバス）等。現在は仕事から離れ、長尾家のことと父の実家である加藤忠廣から繋がる山形県酒田市新堀の加藤家について調査。ウェブサイトを「長尾資料館」とウェブサイト「身似明星」に公開。長尾家の書簡を読むことがきっかけとなり、今は崩し字解読に嵌まっている。

13万坪です。設計は大江新太郎、作庭は7代目小川治兵衛とその甥の岩城巨太郎です。現在は山頂部の主屋とその周囲の庭園だけが残っています。

長尾よねの没後、大林組が所有し、一時期料亭「鎌倉園」として営業しましたが、まもなく閉店。1981（昭和56）年に三和銀行が取得し、三菱銀行に引き継がれました。

2010（平成22）年に三菱銀行から鎌倉市に寄贈されました。

鎌倉駅の西方に位置する鎌倉大仏を過ぎるとトンネルがあり、そこを過ぎると笛田というところに出ます。そこから左の方に折れて鎌倉山に登る道があります。この辺り一帯が鎌倉山で、そのちょうど東南の端辺りが扇湖山荘のあったところです。

現在の等高線図（図1）を見ると、頂上部分に主屋、その周辺に庭園、そして主屋の北の山の上に伏見亭があります。西側も山になっていて、東側と南側は急な谷になっていきます。およそ20mの高低差があるかと思えます。

当初は扇湖山荘の麓の南と北の谷戸には大きな池を配した庭園がありました。ともに立派な茶室を備え、両方の庭はトンネルで結ばれていました。この2つの庭は長尾家が資金に窮した1960（昭和35）年ごろに周囲の山とともに売却され、住宅地として開発されました。

1946（昭和21年）の扇湖山荘の航空写真（図2）を見ると前庭と裏庭が写っています。現在は宅地になっています。

長尾家について一緒に調べてきました土居隆氏は、この近くの鎌倉市極楽寺というところに生まれ、鎌倉山の上の方にある幼稚園に通っていたそうです。子どもの足で山をぐるりと回ると大変なので、長尾家に相談して、敷地内の庭を上って幼稚園に通っていたそうです。この庭は子どもたちの遊び場になっていたそうです。子どもながら神秘的で素晴らしいと感じたと話していました。土居氏の美意識は扇湖山荘の庭から与えられたと今でも言っています。前庭と裏庭を繋ぐトンネルは扇湖山荘



図2 1946年（昭和21年）頃の扇湖山荘 国土地理院空中写真閲覧サービスの図に筆者追記

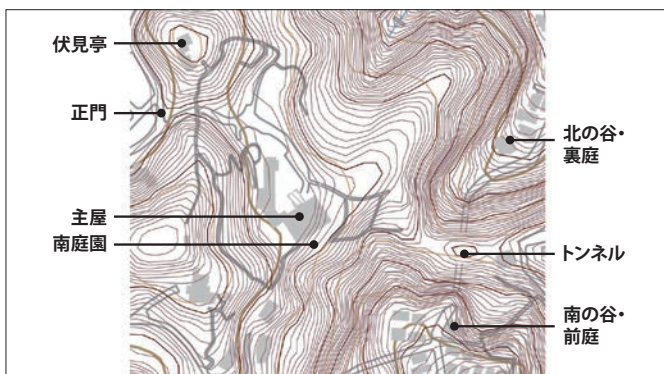


図1 現在の扇湖山荘 等高線図（1.0m）
地理院タイル（標高タイル）を「Web等高線メーカー」サイトで作成したものに筆者追記

ができる前からあり、今も地元の人達が便利に使っています。

扇湖山荘の訪問者・半泥子と魯山人

さて、この扇湖山荘にも多くの人が招待され、宴会が催されました。また、長尾美術館所蔵の「仁清の壺(註1)」を見に訪れた人も多くいました。その一人が川喜田半泥子です。半泥子は陶芸家としても知られ、欽弥の所属していた「延命会」という茶の湯の会の一員でもありました。

それまで「仁清」をあまり評価していなかった半泥子は欽弥に頼んで、1937(昭和12)年2月、扇湖山荘を訪れ、「仁清の壺」を見分しました。この壺を見て仁清に対する認識を新たにしたいということでした。この時の様子は、半泥子を書いた『随筆泥仏堂日録(註2)』に非常に詳しく書かれています。

大船からタクシーで扇湖山荘に向かい、着くとまず庭を案内されました。それから地下の美術品を見て、次に食事やお酒のもてなしを受け、かなり酔ってしまった後に「仁清の壺」が出てきたといった話が書かれています。

後日、半泥子はその日の礼状を欽弥に送っており、長尾資料館で保管する書簡の中に残っています。

この時、よねは半泥子を迎えるために、料理を盛る器を一日がかりで選び、支援していた北大路魯山人を呼びその手料理でもてなしました。

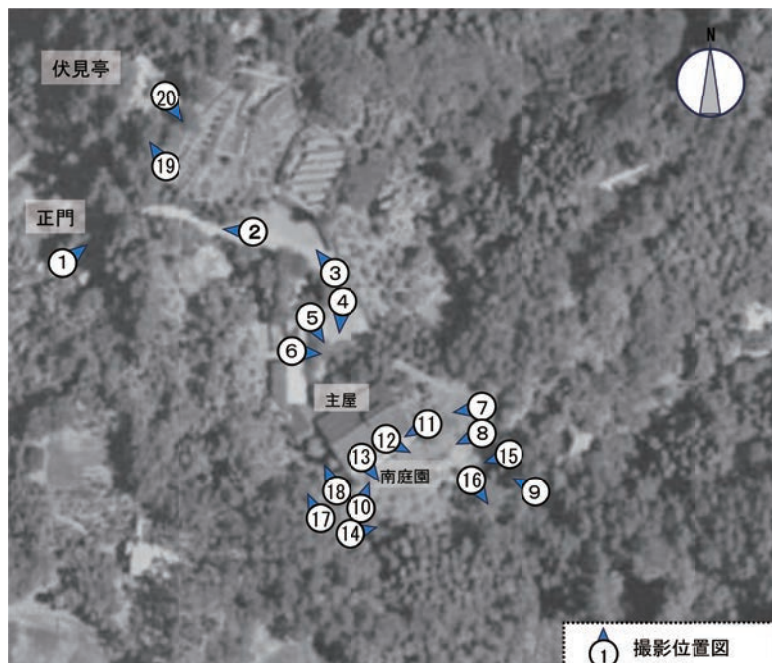
当時、星ヶ岡茶寮を追放になり窮地に立たされていた魯山人を救ったのが長尾家でした。欽弥は魯山人を連れて、瀬戸古窯発掘の旅に出ています。「わかもと」のノベルティを依頼され、大量に焼き物を焼くことで魯山人は次第に元氣を取り戻したそうです。

見るからに気難しそうで近寄りたいたい雰囲気な魯山人ですが、宜雨荘での宴会でのことです。よねの隣に魯山人が座り、2人が話をしていたところ、急によねが魯山人の頬をぴしゃりと打ったそうです。魯山人は母親に叱られた子供のようにしゅんとしていたそうです。目撃したのは宜雨荘でも登場した村田五郎です。

当時の魯山人にそんなことができたのは長尾の奥さんだけだろうと手記(註3)には書かれています。東の魯山人、西の半泥子と並び称された2人ですが、西の半泥子が仁清の壺を見に扇湖山荘を訪れたとき東の魯山人が自らの手料理でもてなしたという話です。また、それを演出したのが長尾よねでした。

写真で見る扇湖山荘

撮影位置図



正門・アプローチ



①近年の正門です。門を入ると左側(西)と正面(北)に山があります。その間が切り通しになっていて、上に橋が架かっています。左方向に行くと伏見亭(茶室)、右の山道を行くと南庭園へと下って行きます。(近年 土居隆氏 撮影)



②門を入ると砂利道になっていて主屋に向かいます。右上に伏見亭が見えます。(※2)

特記以外

※1 1953年3月撮影(カラースライド)

※2 1955年4月15日撮影(カラースライド)

※3 撮影年不明(モノクロスライド)

撮影者は不明だが、おそらく長尾欽弥と思われるすべて長尾資料館蔵

主屋



⑦仕切り門を下りると南庭園にでます。主屋は木造2階建て、地下は鉄筋コンクリート造りで、この上に主屋がのっています。上部構造物は、飛騨高山の民家を移築したものです。2階の手前側はホールになっていて、ビリヤード台が置いてあった記憶があります。その奥に欽弥とよねの寝室がありました。地下は美術品の収集倉庫で、戦後長尾美術館として公開されたところです。(※2)

ベランダ



⑩主屋の南面にはベランダがあります。(※2)



⑪かなり広いベランダです。正面の門の先は山道で、正門からみえた橋に続いています。(※1)



⑧主屋の南面です。その前は庭園です。左方向は谷になっています。(※2)



⑨前庭へ下る道の途中から見上げた景色です。たいへん急な坂です。当初、この下の方に前庭と呼ばれる庭がありましたが、扇湖山荘を訪れた人はこの急坂をわざわざ下りてそこまで行く人はいなかったようで、早くから荒れていたようです。(※1)

正門・アプローチ(続き)

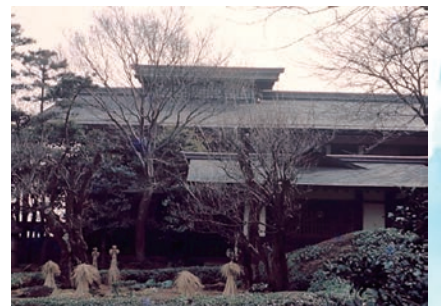


③さらに先へと進む砂利道です。中央右手は梅林です。(※1)

玄関まわり



④主屋の玄関。車寄せです。私が住んでいた頃は、ちょうど私が車の免許を取得中で、この庭で運転の練習をしました。(※1)



⑤主屋玄関の正面です。東側(左)に仕切り門があり、そこを下りると主屋周りの庭園へ繋がっています。(※2)



⑥主屋の東側(右)には仕切り門があり、そこを下りると主屋周りの庭園と繋がっています。(※2)

主屋の西側



⑰主屋西側と山の間の茶庭です。この辺に欽弥の書斎があって、茶室のような部屋があったと思います。(※2)



⑱主屋の西面です。この辺りには風呂場があったのですが、住んでいた当時の管理者に聞くと、暖房システムの関係で風呂を沸かすのに1日何万円もかかると言われました。(※2)

伏見亭



⑲伏見亭です。現存しています。鎌倉市が時々一般公開しています。(※3)



⑳伏見亭からの眺望です。ここからも扇状の相模湾が望めます。(※3)

ベランダ (続き)



⑫ベランダから東方向を見ています。(※1)



⑬南に目を向けると奥方向に相模湾が見えます。海が扇形に見えるこの景色が「扇湖山荘」の名の由来となりました。村田五郎によると、近衛文麿の命名とのこと。(※1)

伸秋亭



⑯南庭園から前庭へ下る道です。この茅葺の建物の詳細ですが、「伸秋亭」と思われます。長尾家の茶の湯の世話をした鈴木宗保は、田中光顕が扇湖山荘を訪れたときに、田舎家風の茶室でお茶を点てたと書いています。その田舎家風の茶室というのがこの建物だと思われます。現在はありません。(※2)

南庭園



⑭主屋南側の南庭園です。右側はかなり急斜面になっています。かつては斜面の下に前庭がありました。(※2)



⑮南庭園の反対方向を見たところです。主屋の前は芝生になっています。(※2)

次に隣松園の話をしてしましょう。

別荘唐崎隣松園の構成と配置

隣松園は1932（昭和7）年の着工です。完成目前の1934（昭和9年）9月、室戸台風で一部倒壊したそうですが、同年の暮れに完成しました。

琵琶湖の湖畔唐崎に位置し、敷地は約1万4千坪であったと思われます。関西方面の要人や外国からの訪問使節の接待に利用され、接待の多きは庭園で行われました。

建築は3代目木村清兵衛（註4）他で、造園は7代目小川治兵衛とその甥岩城巨太郎です。戦後、裏千家に売却され、後に大津市に寄贈されましたが、2006（平成18）年ごろに解体され、跡地は住宅地として開発されました。

現在の等高線図（図3）を見ても明らかのように湖畔の平らな地形を利用していました。本宅宜雨荘は沢を利用して庭園がつくられ、借景を求めることができなかつたため、敷地内で完結する自足的な庭園がつくられ、鎌倉山扇湖山荘は山の上部に、遠景を取り込む借景の庭園をつくりました。

この隣松園は琵琶湖のほとりにあ

り、敷地の外への広がりのある庭園がつくられたということになります。

隣松園の構成と配置については矢ヶ崎善太郎の茶室研究の論文（註5）に記載があります。その内容を解体前の航空写真（図4）に当てはめてみます。

まず建造物としては主屋、茶室3棟と腰掛待合2棟、ボートハウスのほか、付属屋数棟がありました。

主屋は敷地のほぼ中央部、南東前面の芝生の広い庭を介して琵琶湖に面しています。この主屋は田舎家風の建物がいくつか連なっていました。

茶室①は、主屋の西方、湖畔に近いところに、その北側、竹林の中に茶室②が、主屋の北東の林の中に茶室③が建っていました。

そして、主屋の南東方向の琵琶湖畔にボートハウスが建っていました。本宅宜雨荘に比べるとシンプルでわかりやすい構成です。

隣松園の来訪者・東久邇宮稔彦王、大津航空隊慰問会と外国の団体客

この隣松園は特別な来賓のもてなしにモーターボートが使われました。モーターボートは全長が約10m、幅は約3mで、船体はクリーム色に、喫水以下は赤の船底塗料が塗られていました。建造は神戸川崎造

船所で、進水は1833（昭和8）年です。戦前の我が国ではこのような個人用モーターボートはほとんど存在せず、航行時は人々の目を引きつけたものと考えられます。図5には、日の丸が写っています。特別な人が来たときの写真でしょう。宜雨荘にも訪れたことのある東久邇宮稔彦王の来訪の記録があります。

1943（昭和18）年11月、大津航空隊を招いて慰問会が行われました。この時の慰問会プログラムが残っていました。それによると芸人も何人かよばれていたようです。接待には裏千家の人がたくさん来て手伝ってくれたそうです。

慰問会は当初400人ほどの予定だったそうですが、結局600人から700人ぐらいの大宴会になったそうです。というのは、当日航空隊の基地に兵の家族たちが面会に行ったところ、本人たちは「わかもと」のどこ

ろだと聞いて、家族も隣松園に駆け付けたということです。このときの報告書の中に蕎麦屋の伝票も残っていました。そこには「蕎麦800人前、120円」と書いてありました。



図4 1987年(昭和62年)頃の隣松園 国土地理院空中写真閲覧サービスの図に筆者追記



図3 現在の隣松園跡地 等高線図(0.5m) 地理院タイル(標高タイル)を「Web等高線メーカー」サイトで作成

海外からの訪問者も多かったようです。残されていた写真で分かるのは、1938（昭和13）年に、ヒトラーユーゲントが訪れています。同年、アメリカ・カナダのハイスクー



図5 特別な来賓のもてなしにはモーターボートが使われた
(撮影年、撮影者不明)

ル教員団体一行。この時にはボートから降りると一人一人に和傘がプレゼントされたということです。この和傘は非常に好評で、大事に持ち帰ったということです。

団体名は不明ですが、1940（昭和15）年に撮影されたことが分かっている写真も残されています。もしかすると、米国のガーデンクラブではないかと思っていました。一行の訪問は1935（昭和10）年5月15日の記録がありますので、別の団体だったようです。

このように、広い芝生のある隣松園では大人数の接待に使われたということになります。

正門・アプローチ・玄関



①これが正門です。



②主屋の玄関です。特徴的な屋根が連なっています。

撮影ポイント



特記以外はすべて1952年秋撮影(カラスライド)
撮影者は不明だが、おそらく長尾欽弥かと思われる
すべて長尾資料館蔵

写真で見る隣松園

主屋と庭園



③主屋南面です。琵琶湖側に開放的な芝生が広がっています。後ろに見えるのが比叡山だと思います。



④母屋の北西側から琵琶湖を望んだ景色です。最も隣松園らしい一葉だと思います。琵琶湖の湖面、遠くに鈴鹿山脈の山並み、これらを借景として、手前に広い芝生とマツ木立が絶妙に配置されています。

茶室①



⑫上棟幣軸には数寄屋師木村清兵衛の名があったと聞いています。(註4)

ボートハウス



⑬左奥で琵琶湖に通じています。



⑭ボートハウス前の引き込みです。左側が琵琶湖です。



図6 『芒の庭の宴』のシーン 写真④右奥の樹木と同一 (『雨月物語』DVDより)

主屋と庭園 (続き)



⑧主屋の南西の角あたりです。



⑨主屋の南面です。



⑩庭園の東側です。



⑤庭園の南西側。中央に見える橋の先に行くと茶室②があります。川はここをずっと琵琶湖の方に流れています。



⑥広がる芝生の先に琵琶湖の湖面、その奥に山々が連なっています。



⑦主屋の西面です。マツの木立が琵琶湖に向かって連なっています。この付近で接待や宴会が行われたようです。

小川



⑪庭園の南端、琵琶湖へと流れ出る川です。

おわりに

さて、解体された隣松園ですが、実は二つの映画の中で、その姿の一部を残すことになりました。一つは世界的にも評価の高い「雨月物語」です。1953（昭和28）年の公開で、監督は溝口健二です。溝口本人が直接欽弥に使わせてほしいと依頼したそうです。

図6は芒の庭の宴のシーンです。正面の樹木は先述④の右奥に見える樹木のように見えます。

もう一つは「利休」です。野上彌生子原作、勅使河原宏監督、三國連太郎が利休を、山崎勉が秀吉を演じた1989（平成元）年公開の映画です。このときは既に裏千家所有となっていました。

この庭のシーン（図7）の他、主屋や茶室なども何シーンか登場していました。

長尾欽弥とよねのまさに夢の宴と



図7 裏千家所有の頃の隣松園を使用 写真⑩と同アングル（「利休」DVDより）

もういべき稀有な人生を紹介するとともに、2人がつくった3つの邸宅の庭園について、扇湖山荘に残されていたカラースライドを中心に解説を試みました。お話しした内容のほとんどがホームページ「長尾資料館」に掲載されておりあります。ご覧いただければ幸いです。（長尾資料館館長）

註1…「仁清の壺」は、江戸時代初期の陶工野々村仁清作の茶壺で、1951（昭和26）年

6月9日、国宝に指定。名称は「色絵藤花文茶壺（いろえふじばなもんちゃつぽ）」。

註2…川喜田半泥子『随筆泥仏堂目録』、講談社文芸文庫、2007

註3…村田光義『海鳴り』、芦書房、2011

註4…2004（平成16）年、日本庭園研究センターにより調査が行われた。調査結果『隣松園現況調査業務報告書』によれば茶室①の上棟幣軸には「数寄屋師木村清兵衛、手伝今井清右衛門」の名がある。

註5…矢ヶ崎善太郎、『長尾欽彌別邸・隣松園の茶室について』数寄屋師木村清兵衛の研究（2）『日本建築学会近畿支部研究報告集・計画系』、2006・5

註6…「太閤左文字」は、南北朝時代、初代左文字のもっとも代表的な作。1952（昭和27）年11月22日、国宝に指定。名称は「銘左（めいさ）／筑州住（ちくしゅうじゅう）」。

註7…大正から昭和期の刀剣学者。古刀研究の権威。本間美術館（山形県酒田市）の初代館長。

註8…大正から昭和初期にかけて活動した日本の実業家。本名は松本松蔵。書画・骨董品を蒐集。

註9…倉田春一著『経済第一線』大鵬書房、1935

註10…根津美術館創設者の根津嘉一郎。

こぼれ話

長尾家ゆかりの国宝

長尾よねが購入し、後に国宝となった骨董美術品を二つ紹介します。

一つ目は左文字の短刀、「太閤左文字（註6）」とも呼ばれています。本間順治（註7）の指南のもと、井上子爵家の売立会で購入しました。現在はふくやま美術館所蔵です。

二つ目は「仁清の壺」です。長尾家の美術品の中でも逸品中の逸品です。これを見るために多くの人が長尾家を訪れたそうです。

1933（昭和8）年、松本双軒（註8）遺愛品の売立会で購入しました。この壺を競り落としたときの様子が『経済第一線（註9）』という本に書かれています。

世間的にあまり名が聞こえていない一売薬屋本舗が天下の根津（註10）の向こうに立ったのみか、完全に鼻を折って凱歌を上げて、国内無双の仁清の逸品を手に入れたので、一般好事家に君が容易なる富豪であることが認識された。

長尾家衰退の後、「仁清の壺」はどうなったかというと、世界救世教教主の岡田茂吉が手にいれました。

古美術収集家としても知られていた茂吉は他人の所蔵品をあまり褒めることなく、美術館を巡っては酷評するのが常でした。長尾美術館を訪れた時のこともガラクタブばかりと書いています。しかし、「仁清の壺」だけは大いに気に入ったようで絶賛しています。

長尾家が傾き美術品も売却せざるを得ない状況に陥ると、この「仁清の壺」は茂吉に話が行きます。茂吉は当時係争中だった土地を売って念願の「仁清の壺」を手に入れるのですが、既に死の床にあり、亡くなる前の3日間枕元にこの壺を置いていたそうです。

現在、「仁清の壺」は熱海のMOA美術館に所蔵されています。この美術館は、高台にあり大変景色のいいところです。下のエントランスからエスカレーターで上がっていくようになっていて、一番上に展示室があります。この展示室の最初のコーナーにこの壺が置かれています。

解説には、入手のいきさつは全く書かれていませんが、こぼれ話として心に留めてみると少しは感慨があるかと思えます。ぜひ一度行かれてご覧ください。この壺はともかく素晴らしい美術館だと思います。



色絵藤花文茶壺 仁清作 長尾美術館蔵（『国宝図録第一集』、文化財協会、1952より）

庭に向かう私の姿勢

第1回『愛知の庭を知ること』

自分の好みの庭を知ること

たかみのりお
高見 紀雄

2023(令和5)年5月28日(日)オンライン

はじめに

タイトルに「愛知県の庭」を入れたのは、自分が住んでいる県や地方など身近にある庭を知ることが大事だと思っからです。

実は、これは受け売りでして、2009(平成21)年に愛知県支部が発足する際に、龍居竹之介先生(当時会長)からいただいた言葉です。その頃の僕は庭をつくりはじめて10年ぐらいで、周りばかりが気になっ



高見 紀雄 プロフィール

1969年、愛知県刈谷市生まれ。20代前半、デザイン会社を経て、映画美術に携わる。映画「熊楠」で美術監督林田裕至氏(シン・ゴジラ、シン・ウルトラマンなど、日本アカデミー最優秀美術賞)に師事。和歌山県熊野での撮影で植物に触れて導かれるように造園の世界に入る。刈谷市の造園会社で修業の後、2001年、高見庭苑として独立。現在に至る。あいち花フェスタ実行委員会、米・ジャクソンパーク修復工事参加。2011年から愛知県支部長。

ていました。周りの人がどういう庭をつくるのだろうかとか、いろいろな雑誌を見て憧れて真似をするなど模索している頃で、龍居先生から「まず、愛知県の庭を知りなさい」という言葉をいただき、すごく刺さりました。その当時、静岡の鈴木直衛氏や河西力氏、兵庫の大北望氏など偉大な巨匠たちの庭に憧れていて、自分の周りがある愛知県の庭に対してあまり興味がなく、深く知らなかったのです。龍居先生の言葉によって、一番必要なのは、自分の立ち位置であり、自分が住んでいるところに自分がどういうふうな根を張っていくのかを知ることが重要であることに気づかされました。確かに名の知られた雑誌に取り上げられたとか、有名になりたいとか、若いときなら当然そういう気持ち

ちはあると思いますが、実は、本来庭のあり方は自分の周り、自分の身近なところから少しずつ変えていくことによって、文化というものが広がっていくのだなと思ったのです。

しかし、愛知県の気候は高温多湿で、ここでは育たない樹木や植物があります。地域の風土にも目を向けて、形ばかりではなくて、この地域を知ることによって、本質的な庭のあり方を感じていきたいと思うようになりました。

今日は、まず自分がなぜ今の立ち位置にいるのかを説明して、僕がつくる庭の作風について話したいと思っています。

映画美術スタッフ時代

正直言うと、高校生ぐらいまで植物には全く興味がなく、どちらかというと、映画に興味を持ち、映画監督になりたいという夢を抱き、東京デザイン学院に進学しました。卒業後、名古屋市の山崎デザインという会社にコピーライターとして1年半ほど勤務しました。

その頃、映画に関するサロンのなシネマスコーレやシネマテークなど

といった映画館に頻繁に通っていました。そこで「ロビンソンの庭」という映画を見て衝撃を受けました。

その映画の監督である山本政志氏と交流を持ちたいと思い、その映画を上映する映画祭の企画を立て、実施したことにより、山本監督とお会いすることとなり、さらに感銘を受けました。

そのように映画に憧れていた20歳前後の頃、憧れの山本監督が粘菌学者の南方熊楠の映画を撮影すると知ったときに、どうしても山本監督につきたいと思いスタッフになりました。自分は、美術系の学校にいたことで絵が描けましたので美術監督の下につきました。それが林田裕至氏で、この出会いも私の人生にすごく影響を与えてくれました。

その映画は熊楠が生まれ育った町、和歌山県田辺市で撮影されました。熊楠の生家をオープンセットにして、実際に熊楠が粘菌の勉強をした部屋を再現して、昼夜問わず撮影しました。

印象にあるのが、雨が降る深夜に河原へ行き雑草を掘って、それを朝方植えるというシーンです。草とい

うのは移植するとすぐしおれてしま
うものですから、河原で掘ったらす
ぐに植付けます。撮影部隊が来る朝
8時頃、雨がちょうど上がり、朝露
の中、植物と雨と光の映像を綺麗な
舞台セットで撮影しました。その時
の演出では、熊楠の生家に木を持っ
てきて実際に植えるのですが、掘っ
て植えて掘って植えてを繰り返すよ
うな仕事をしていました。熊野の原
生林で撮るシーンが何度かあって、
実際の川の流れや石、熊野の山中な
どからすごい大自然を感じながら撮
影をしていき、だんだんと熊野の森
に魅了されていきました。

中でも一番印象的な出来事があり
ました。熊野の山中、台風で倒れた
スギによって祠が破壊されるという
オープニングシーンの撮影の時のこ
とです。撮影用の仮設の祠を建設
し、高さ30mぐらいのスギを実際に
切り倒し、その木が祠を壊していく
というシーンでした。ところが伐り
倒した木が上手いこと祠をよけてい
くのです。2本伐りましたが、2本
とも祠をよけて倒れるのです。プロ
の山師も、こんなことは絶対ないと
言っていました。熊野の神が宿って
しまったのでしょうか。これは
何本伐つてもよけていくだろうとい
うことで、撮影はストップしました。

その当時はまだ庭のことが分かって
いなかったのですが、そういう神秘
的な森というか生命というか、森と
自然の神秘性に触れました。その感
覚は地元に帰ってからずっと抜け
ませんでした。

結局、映画「熊楠-KUMAGUSU」
は、資金難で中断しました。中断し
ている間、刈谷市に戻り、もう少し
植物や木を植えることを学んでおこ
うと地元の造園会社に入りました。
撮影が再開するのを待ち焦がれてい
たのですが、結局撮影は再開されま
せんでした。そのままこの業界に入
ってしまいました。逆に言うと造園
の魅力にだんだんと取り憑かれて、
熊野で感じた生命、森、神秘性など
の想いが、この造園の世界で生かせ
るのではないかと、徐々に導かれて
現在に至っています。

それから約30年ぶりに映画の製作
に復帰しました。山本監督から請わ
れ、2019（令和元）年に『脳天
パラダイス』で映画の世界に戻りま
した。エンドタイトルにも「庭師高
見紀雄」として載っています。多分
庭師としてエンドクレジットで載っ
たのは初めてだと思います。

その映画の主役はいとうせいこう
氏でした。いとう氏は、以前からボ
タニカルとかプランツに精通してい

て、「ベランダ」という名称でも有
名になっていのように、ベランダで
植物を育てていました。

ちょうど僕が会った頃は「ルーマ
ー（室内園芸）」と言って、植物を室
内に入れていこうという動きをして
いて、大変共感しました。そして、
これからのボタニカルのあり方に対
するイベントをやりましようという
ことになりました。2020（令和
2）年、名古屋で、吉谷桂子氏を加
えた3人で「ナチュラリスティック」
についてのトークイベントを開催す
る予定でしたが、残念なことに新型
コロナウイルス感染症の流行により
中止になってしまいました。

作庭・作風のルーツ

次に、どのようにして今の自分が
在るのかという作風のルーツをお話
します。

一番のきっかけに
なったのは2004
（平成16）年に名古屋
市栄の久屋大通り公
園で行われた「12人
の庭」というガーデ
ンショーに参加した
ことです。

普段の作庭はお施
主さんのいる仕事で

ですので、自分が本当にやりたいこと
はできないのが本来です。ガーデ
ンショーでは自分の好きなようにつく
れますので、自分好みの庭とはなん
だろうということを考えて作庭しま
した。

その時、以前から鉄の素材にすご
く憧れていたことから、「鉄」が自分
の中のルーツにあると気づきまし
た。当時、アイアンアーティストの
檜森隆夫氏に出会ったことで、鉄の
素材の良さや可能性にすごく刺激を
受けました。そこで鉄を使って制作
した庭をガーデンショー「12人の庭」
で発表しました。

「12人の庭」・鉄のゲート（図1）

ぐにやぐにやとしているのが鉄で
できたゲートです。これは全て鉄の
棒です。鉄棒を熱し、叩きながら、



図1 鉄のゲート ガーデンショー「12人の庭」
パンフレットより

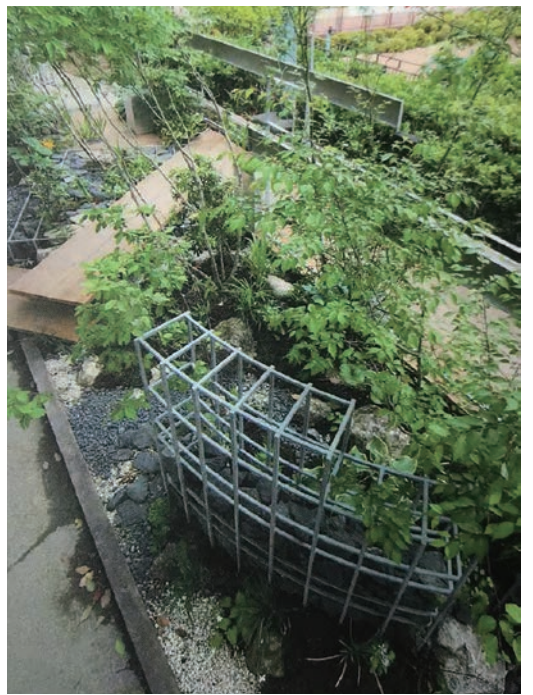


図2 格子のオブジェ ガーデンショー「12人の庭」パンフレットより



図3 錆鉄の門柱 2018.11.30

曲げ、溶接していく、すべて手作業で形づくっていきます。鉄の中にステンドグラスをはめ込んでいます。自分のデザイン画をもとにクラフト系アーティストにつくってもらいました。おそらく、このようなゲートは世の中にはないだろうと思っています。

錆びないように塗装はどうしたらいいのかを考えました。黒だと当たり前すぎるということで、亜鉛98%の亜鉛ローバルという塗装にしました。初めて「鉄」に触れた作品で、その後も「鉄」を使っていくことになりました。

格子のオブジェ (図2)

自分の個性が出たのがこの鉄の格子状のオブジェです。無垢の鉄を曲

げてアール状にしました。今では鉄のメッシュ状の蛇籠風のもの盛んに使われていますが、それらが海外から輸入される前に発表しています。

これは、今から18年ぐらい前の作品で、当時、「ガビオン」のようなものは既に認知されており、多分こういう時代が来るだろうというのは予想していたので、先を行くためにこのような鉄の格子をつくり、それに碎石を詰めました。

当時、鉄をふんだんに使うというのも珍しく、有機的な樹木と鉄との融合が相まって、通りがかりの人には結構好評でした。僕の庭の人生を大きく変えた庭でもあります。

鉄の格子に碎石を詰め込んだデザインを知ったのはスイス出身のヘルツォーク&ド・ムーロンという建築

家ユニットによるアメリカ・カリフォルニア州のドミナス・ワイナリー(1997)という建築です。

僕が鉄を好むようになったのは、育った環境にルーツがあります。僕の住む愛知県刈谷市は、トヨタ系の本社が多く、元々は紡織、基本は織機ですが、そういった工場の多い土地で、しかも僕が育った中山町というのは準工業地帯で周りに木材加工工場、紡績工場、製陶場や製陶場の廃材置き場があり、そういう地域の長屋で育ちました。長屋の裏に行くといくつか真空管の廃材とかが転がっていて、階段などの鉄部は錆びていたり、朽ちていたり、そういう風景を見て育ちました。

庭の作風には幼少期に見た心象風景とか、原風景が影響するといわれ

ます。まさに僕も子供のときに育った環境で見た原風景が自分の作風のルーツなのだろうと思います。

それで錆びた鉄骨とかにツル植物が巻き付いているものにすごい生命力を感じてしまいます。そういうものが心に残っていて、それを庭で表現できないかなあと思っています。それがガーデンショーで初めて発表した鉄の作品に繋がっています。

その頃、鉄の錆にも憧れていましたが、錆の作品というのはいままで、お客さんにも錆びるものをするめることに対して抵抗感がありました。そこで、まず自邸で錆のものを試してみようと、2003(平成15)年、自分の家のポストと門柱を錆鉄でつくりました。

錆鉄の門柱 (図3)

これはコールテン鋼を使っています。コールテン鋼は、錆びても無垢の鉄よりも少し強度が高いことがわかっていました。そこで、コールテン鋼に「サビ-X」という錆発生促進剤を吹きかけて錆びさせています。最初は汚い錆ですが、だんだんと赤錆から黒錆に変化していきます。黒錆まで行くと、ほとんど錆びて行かなくなります。その錆というコーティングによって、その鉄はも

う永久にそのまま朽ちません。本当に錆を出すまでには、長い時間、門柱ですと1年半ぐらいかかりますが、いい錆が出てからは触っても手に錆がつくことはなく、朽ちていきません。この事例は、20年ほど経っていますが、ノーメンテナンスです。

鉄のパーゴラ (図4・5)

2005 (平成17) 年につくった鉄のパーゴラです (図4)。これも自分の人生を変えた庭の一つです。

2つの鉄製のパーゴラを狭い空間に向かい合って据えています。この状態で見るとオブジェのような、インスタレーション的な感じに映るのですが、それが20年経つと、こういう緑に囲まれた有機的な空間 (図5) になりました。

デッキから降りると石のテラスが



図4 鉄のパーゴラ (施工中) 2011.7.9



図5 鉄のパーゴラ 2021.5.30

あり、狭い空間ですが回遊式になっています。このパーゴラには屋根がかかっていて目隠しの板が随所についています。ですから室内からの景色も、この鉄板によって隠したいところだけ隠しています。隣家の窓を隠すという機能性を帯びたデザインになっています。

通常こういうものはデザイン重視と思われがちですが、デザインというのは、機能が先だと思っています。機能が先にあるからこそ、それに見合ったデザインを考えていくのであって、デザインありきということとはまずないだろうなと思っています。

ここで、ぜひお話ししたいストーリーがあります。つくった当時、小学校低学年と幼稚園のお子さんが2人いましたが、僕はどちらかというと、

と、大人が楽しむ庭というか、狭い空間にいかに入れるかということとをコンセプトとしてつくりました。

お施主さんは、四角い鉄のパーゴラが2つあるデザインに、最初はびっくりしたらしいのですが、琴線に触れたと言っていたきました。要するに、何ができるかわからないけれど、何か自分の中で「ざわっ」として、面白いなと思ったというのです。そのように言っていたくことは提案する側にとって一番嬉しいことで、何かわからないものを、いいなと感じてもらえるというのは本当に喜ばしいことです。

さらにその後ですが、お子さんがちが中学生ぐらいだった頃、朝起きたら、まず真っ先にこの庭に出ていき、歯磨きをするというのです。夏場には、日陰ができる午前中は右のパーゴラのベンチで読書して、光が変わる午後になると左のパーゴラのデッキで寝転びながら漫画や本を読んだりする。子どもたちの生活空間が部屋の中だけではなく、外にまで広がっていると話してくれました。

その先のストーリーもあります。下の娘さんが、中学生になって生徒会の会長に立候補した時に、「学校に緑を増やしたい」を公約に挙げたと聞きました。その理由は、「この庭に

いると緑が自分を癒してくれる。学校にもこういう空間が欲しい」ということでした。

一方、大学生になったお兄さんは、「この庭があったからこの大学に入れました」と言ってくれたのです。なぜかというところ、本はそんなに好きじゃなかったけれど、庭のベンチで本を読むのが好きになってから、国語の授業が聞けるようになった」とか。その話を聞いて、僕はそこまでのストーリーは考えていなかったのですが、庭というのは住む人たちの生活や人生まで変えていく力があるのだと実感し、感動しました。そこまで住む人のストーリーを考えて、想像してつくっていくようにデザインを持つていかなければいけないのだと改めて感じさせられた庭です。

錆鉄のパーゴラ (図6・7)

これは2008 (平成20) 年に、名古屋屋市につくった錆鉄のパーゴラです。ここは道路に面していますので、通りすがりの人が触って汚れたというクレームがお施主さんにきてはいけないうことで、本来は本家の錆が良かったのですが、錆に見立てて錆塗装とした作品です。

大きな鉄板で大人の目線を隠しています。当時、施主さんの2人の娘



図6 錆塗装のパーゴラ 2013.5.22

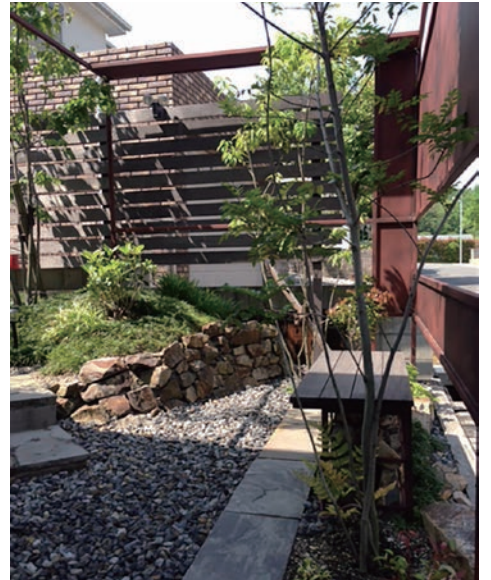


図7 錆塗装のパーゴラ 2013.5.22

石積の門柱(図8)

さんがまだ小学校に入ったばかりで近所の子が遊びに来ていました。子どもたちは玄関から入らず庭から入ってくるので、道路に面していて危ないということで、子どもの視線だけは空けておいてあげようとスリットを設けています。

実際に見ると、スリットの間から見える景色も意外と面白くて、用途のために空けたのですが、庭の効果としても奥行きが感じられ、通りかかる人がちらっと見ても面白く、中に何があるのだらうと想像ができるような庭になっています。

敷地内にあるベンチは、近所の子どもが遊びに来ると、ここで待ち合わせをしながらゲームをしているそうです。子どもたちの待合です。コンセプトチュアルで面白い庭でした。

この庭は昔ながらのコンクリート造の古いお宅でモミジのある和風の庭をリフォームしました。奥様の趣味で主庭はバラの庭に変えました。シンボリックなものをということで、門柱に石を積むことにしました。高さは約1・6mで、僕は技術不足で、ステンレスを溶接して枠をつくり、それに石を収納していく方法で石を積みました。

石積の良さは角にあると思うのですが、この4ヶ所の角石を選ぶこと自体すごい労力がかかるので、あえて角を消すという意味でも、コストダウンに繋がったと思います。正直言って、我流というのか、本流ではないことを行っているのです。これをお勧めはしなないです。石積はデザイン



図8 石積の門柱 2018.4.26

だけではなく、強度や安心感を与えないといけないと思っていますので、このようなデザインにしました。

このデザインのヒントになったのは、実は静岡県伊豆の国市の韮山反射炉です。国指定史跡であり、「明治日本の産業革命遺産」として世界遺産に登録されています。反射炉に補強がしてあり、それが錆びた鉄で格子状に組まれています。それを見たときに、補強しなくてはいけないのだとすると、最初から補強をデザインにしてみれば、安心なんだと思ったのがヒントとなりこのデザインになりました。

見立てとモダニズム庭園

明治から昭和にかけての庭は、より自然の環境に近い野や川の流れとか、そういうものを持ち込んでいました。日本人のDNAはコケや川のせせらぎとかそういうものをいいな

と思うようにできていますので、それが今も脈々と流れていて、植治以降、そのような系統の庭が今も続いているのだと思います。

愛知県は石の産地で御影石も採れる地域です。近隣の岐阜県には恵那石など山石系統もあります。三重県には孤野石、伊勢の桃取石、静岡県の天竜青石など色石も近いところにあります。そのように石には恵まれたところです。

僕が修行した頃は山水だ、枯山水だといろいろな色石、山石が土留などにふんだんに使われていました。一般の方の庭にも仕立物のマツとかマキがよく使われていて庭は勢いがありました。

それが今は愛知県という石積の方が有名で、石を組んだり、積むことによってそれを一つの何かに見立てて、庭のアイテムとして使うことが結構盛んに行われています。

昔から名古屋には、三河仏壇に見られるように端材を利用して細工などを施し付加価値を付けて新たなものをつくり上げる文化があるので、それに近いようなことが石材にも言えるのではないかと思います。

例えば、幡豆の方に鹿川という碎石の土場がありますが、その四角い碎石を加工して積んでいく技術が

若い人たちがつくるモダン庭園にはよく使われています。

本来だったら碎石は石積の裏込め材や護岸工事に使われているような素材でしたが、一つずつ手を加えて積み重ねていくという付加価値をつけることによって、お金をいただける技術になっていると僕は思っています。

高温多湿な愛知の風土と植栽

愛知県は大変暑く、東北とは比べられないくらい過酷な夏を迎えます。修行した頃は雑木の庭のブームが来ていました。最近も若い人たちは山採りの木を植えています。

僕が始めた当時は、仕立て物の時代で、マキや台杉が主流でした。その頃、僕も雑木に憧れていて、山採りの柔らかい樹形のものを使ってみたいと思っていて、刈谷市の土壌や風土も考えずに植えていました。結局、枯らしてしまい、反省しています。

そのことをよくわかってるのが愛知県の植木生産者の方で、何年も前から苗や幼木から山採りに見立てるように育てて、販売しています。僕もその考え方に賛同しています。最近では山採りの樹木はほぼ使わず、植木屋さんが幼木から丹精込めて育てた株立ちの樹木を使っています。

愛知県の庭園と建築

愛知県で有名なのは名古屋城。天守閣は戦災で焼失し、現在はコンクリートにより復元されています。この石垣を維持するためにはある程度の重みとしてコンクリート製であつても天守が必要です。現在、名古屋は木造で復元しようと動いています。

国指定名勝二之丸庭園は近年発掘され、江戸時代の絵図のままに残されていたことがわかりました。現在、修復工事が行われており、その様子が見られるので、面白い状況です。

織田有楽斎の茶室「如庵」は犬山にまだ存在しています。

近代数寄屋の堀口捨巳がつくった建築「料亭・八勝館」は重要文化財になっています。一般人でも料亭の客として入ってもらえれば庭園が見られます。

「料亭か茂免」の庭園は7代目小川治兵衛（植治）の作庭です。植治の庭は名古屋では珍しく、唯一残されている庭園だと思います。ここはランチからでも楽しめますので、植治の庭を見たい方には是非お勧めです。豊田市美術館は谷口吉生設計です。スケールの大きい建築として存在しています。外部空間設計はピーター・ウォーカーです。建築と相まっ

たランドスケープもすごく素敵です。

まとめ

「愛知の庭を知ること 自分好みの庭を知ること」をテーマとしてお話ししましたが、自分の好みばかりを売っていくというのもしよくないと思います。重要なのは施主との相互関係で、押し付けるのではなく、自分が持っているものをいかに引き出してもらうかということも大事だと思います。

15年ぐらい前は、建築家と仕事をするのが多かったのですが、その時に感じたのは、建築家は僕の引き出しは全く無視で、要は自分のつくる建築に似合うような木を植えろというぐらいの勢いでした。そういうものに嫌悪感があり、今は全く建築家との仕事はしなくなりました。良いのか悪いのかといったところです。

逆に言うと、今の若い人たちは、言われたままつくっているような気がします。建築を壊さない術ということが学んでいるのかわかりませんが、本質的なことを知ってしまうとこんなことはできないだろうなというところもあると思います。その辺が、僕の中では疑問かなと思っています。

（愛知県支部長）

※写真は全て筆者撮影

受講感想



本年度より技術委員長に就任し、本講座を企画することとなりました。

清水 哲也
しみず てつや

対面式で行われていたこの講座はコロナ禍で確立された「Zoom形式」で大きく変わりました。地方の会員が参加しやすくなったことです。その結果、全国の会員の作庭写真を紹介していただくことによって、その考え方には地方色が大きく関わっていることも知ることとなりました。

「庭に向かう私の姿勢」をテーマに第1回は愛知県の高見紀雄氏を講師にお願いいたしました。高温多湿という条件下の植栽材料の選別は経験に基づいた徹底したものでした。

「鉄」を庭の材料として紹介していただいた作品にはとても興味深いものがあり、門構え、仕切り、目隠しなどの可能性は無限であり、斬新なデザインは受講生には衝撃的だったと思います。

今回、講師の方々には自分の住んでいる地域を紹介していただくこともお願いしました。何故この庭をつくったのか？何故そう思ったのか？を知ることが庭づくりの本質に近づけると考えるからです。

（技術委員長）

(二社)日本造園組合連合会(造園連)の創立50周年を記念して、龍居竹之介名誉会長が寄稿した祝辞を造園連のご了承をいただき転載します。

上原敬二先生と造園連半世紀を祝う

たついのすけ
龍居 竹之介

上原敬二先生！お喜びください。
先生が日本の造園界の結束と地位向上を推進する新原動力として応援された造園連こと一般社団法人日本造園組合連合会が、着実な業績を重ねて歩み続けられた結果、令和5年の今年、創立50周年を迎える快挙を果たされましたよ。

先生は造園人も腰を据えて物事を学ぶ大切さ、視野の広いものの見方の必要性など、生来の主張を造園連でもめざすべく造園アカデミーなる学びの場もお生み下さいましたね。

代々のリーダーがこの教えを守り、老若を問わず会員たちに学びの大切さを伝え続けられたことも半世紀の

大成果だと存じています。先生、本当にありがとうございます。

しかし、私が最近不安に感じているのは、国全体、社会全体が、先生はじめ私たち造園関係者が大切な宝物と考えてきた「緑の力」を無神経に軽視する動きをチラつかせていることに對してです。そしてそれは緑に縁の深い農学、林学などの学問の存在を筆頭に、現場造園社会全体まで疎外している感じなのです。

人で充満する都市は再開発の名目で緑ごと宅地を高層住宅に変貌させるやら、人々の憩いの場であるべき静寂な公園は、経済活性化の看板のもとイベント優先の広場拡充で緑を中心には考えなくなっ

て行きます。

先生の恩師・本多静六先生のご苦勞の作であり、都市公園の草分けの日比谷公園も、その動きの中でイベント会場色を強調した姿への改造がきまつたとか。また先生ご自身が研究を重ねられ育てら

れた明治神宮外苑のあの美しいイチヨウ並木を中心にした都心の比類なき緑の景観美の効果も、再開発の影響で失われるのではと、都民に案じられております。

中国の「大学」という古い本に「修身齊家治國平天下(天下を治めるにはまず自身の身を修め次に家庭を平和に、次に國を治め、次に天下を治める順序に従うべし)」とありますが、私はこれを「人の暮らし周辺の緑をまず大事にし、順にひろげ国全体の緑を大事にすれば國は災害も受けますが、先生いかがですか。」

その意味で先生から造園アカデミーを通じ物の考え方や、造園の力で緑を活かす大切さを教えられた、次々の世代に伝えられてきた半世紀にわたる造園連会員の皆さんの英智が、来るべき60周年に向けて発揮されんことを、そして腰を据えてのご発展を、心からお祈りいたします。最後に改めましてもう一度造園連さん創立50周年、本当におめでとうございませう。永遠なれ造園連！

寄稿「創立50周年記念誌―伝統の継承と創造―技と人をつないで―庭―未来へ―」
2023年5月25日発行



龍居竹之介名誉会長 近影



柔らかな曲線の石貼りと力強い六方石による研修成果

コラム 静岡県熱海市熱海上多賀芸術村での伝統庭園技塾

みやけひでじ
三宅 秀俊



前号の巻頭言でお話ししたように、國営武蔵丘陵森林公園での伝統庭園技塾は充実した内容でしたが、唯一残念だったのは、各班でつくった実習課題を講師講評後、全て壊してしまうことでした。受講生も私も複雑な心境でした。

そうした思いを解決したのが、1987(昭和62)年から1990(平成2)年に計5回開催された熱海市熱海上多賀芸術村を会場とする伝統庭園技塾でした。ここでは研修成果



雑誌『庭』73号に掲載された自作の石積

のほとんどを残すことができました。
熱海では充実した日中の実習の
他、夜の講座もあり、鈴木直衛、河
西力の両講師による連日連夜の研修
が続きました。さらに、夜の講座の
後に話をしたい人は集まれと声がか
かり、講師と全国各地からの受講生
との遠慮のない話で盛り上がりまし
た。両講師の物凄いパワーで、時間
を忘れていろいろな話をして、大変
楽しかったことを思い出します。
この研修に参加するまで石は固い
ものと思っていたが、石でも柔
らかな表現ができるのだと学びまし
た。それから岡山に戻ってつくった
作品が雑誌『庭』73号に掲載されま
した。
(岡山県支部長)

報告:『ランドスケープ研究』特集
「日本庭園の継承と発展」に寄稿

表題の冊子は、日本造園学会が発
行する学会誌の特集号です。内容は
昨今の日本庭園をめぐる国内外の動
向と課題をふまえ、①日本庭園の継
承と発展に関する総論、②日本庭園
の「こころ」の世界、③日本庭園の
「わざ」の世界、④日本庭園の展開と
いう4部構成となっています。

このうち、②と③の日本庭園の
「こころ」と「わざ」に関しては、2
021年度より日本造園学会に設置
された『日本庭園の「こころ」と「わ
ざ」に関する研究推進委員会(以降、
推進委員会)』における2年間の調査
研究の成果をベースとしたものです。

推進委員会では「こころ」部会と
「わざ」部会に分かれ調査研究を進め
ています。「わざ」部会は、当協会を
はじめ、日本造園組合連合会、日本
造園建設業協会、京都府造園協同組
合など日本庭園の「わざ」に関わり
の深い団体が参加しており、初年度
には日本庭園の「わざ」を体系化(下
図)しました。2年目からは、各団
体で担当を決め、分類された「わざ」
の詳細情報を収集し「わざシート」
としてまとめています。

当協会は高橋康夫会長と小沼康子

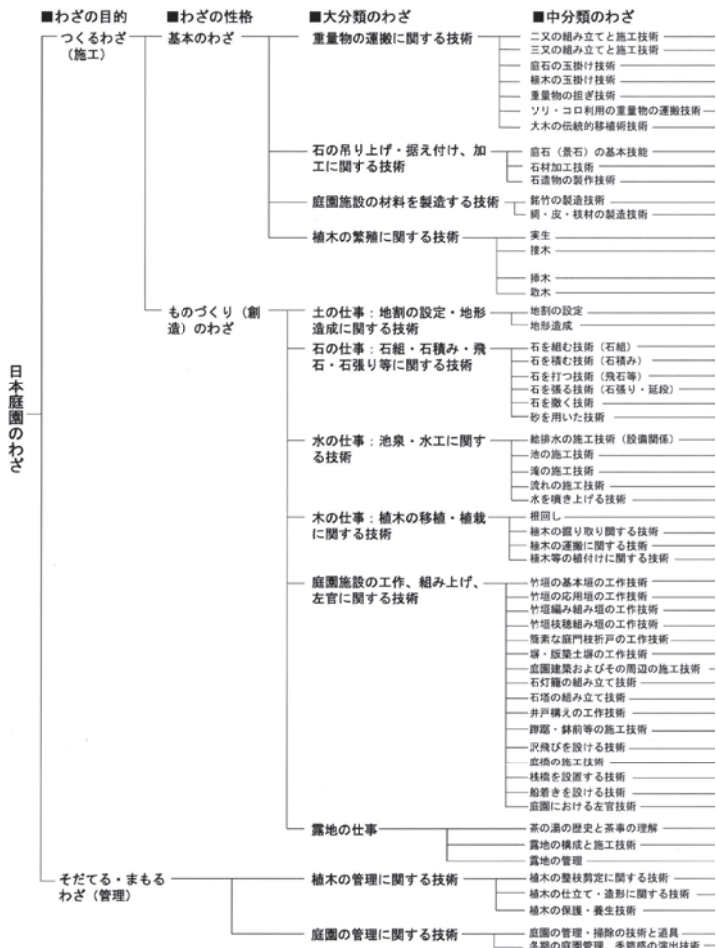
常務理事、細野達哉氏(オブザーバ
ー参加)が「水の仕事」を担当して
調査研究を進めています。「水の仕
事」とは、水源から流末に至るまで
に用いられる「わざ」をさし、形状
としては大きく滝、流れ、池に分け
られ、護岸や底部の構造、石組、石
積などによる修景や材料など、多様
な観点からの分類整理を試みてい
ます。

当協会は、今回発行された特集号
に、担当の「水の仕事」と関連する
話題として、「東京都立の文化財庭園
に見る池泉のわざ」と題して寄稿し

ました。中でも、近年、保存・管理
において重要度の高い「水源」と「護
岸」にしばって現状を概観し、課題
が多いことを述べました。

「水の仕事」は、日本庭園にとって
重要な「わざ」が詰まっているテー
マですが、体系化された情報は多く
はありません。そこで、研究推進
の継続にあたり経験豊富な会員の
方々の情報提供をお願いしたい次第
です。
(文責・小沼康子)

図の出版:『ランドスケープ研究』特集
「日本庭園の継承と発展」第87巻第2
号、日本造園学会、2023.7.31



「日本庭園のわざ」の体系図(部分)

支部たより

東京都支部主催

第2回庭園見学バスツアー

2023（令和5）年7月16日（日）

鈴木康幸^{すずき やすゆき}



昨年11月に続く庭園バスツアーの第2弾を開催した。私が

作庭した国立市の庭「しかくのにわ」と弊社で管理している旧本田家住宅、再開発が計画され、話題となっている日比谷公園、そして平井孝幸氏作庭の上尾の庭を巡ることとし



佐藤邸「しかくのにわ」筆者作庭 竣工時 2021.5.27 筆者撮影



「上尾の庭」平井孝幸氏作庭 竣工時 2023.4月末 平井孝幸氏撮影

た。当初は本部との共催を交渉した
がかなわず、単独開催となった。

まずは日比谷公園から。当日は、
気温が35度を超えて、直射日光が肌
に刺さるほどの猛暑となっていました
たが、高橋康夫会長の案内で約1時
間、園内を歩き、時々立ち止まり、
お話を聞き、また歩きと園内の隅々
までいろいろなエピソードを交えな
がらお話ししていただいた。午前10
時からだったので、日陰も多く、暑
さにも耐えられた。

東京都が進める日比谷公園の再開
発は、初代会長本多静六氏の考え、
歴史的価値などをすべて無視したデ

ザインで悲しい限りである。近世か
ら現代の遺産として後世にも残して
欲しいと思う。

次は旧本田家住宅へ。本田家は私
の祖父からの御得意様であり、数年
前に甲州街道に面した旧家屋を土地
と共に国立市に寄贈され、現在国立
市が管理している。旧家屋を調査し
た結果、江戸時代中頃の建物で東京
都に現存している木造住宅では一番
古いことが分かり、文化財として解
体、復元されることとなっている。
たまたま弊社（株）植繁は公共事業
もしており、引き続き国立市の下、
管理に携わっている。市の職員さん

が丁寧な解説してくだ
さり、今後の作業にも
励みになった。

次は佐藤邸「しかく
のにわ」。佐藤邸は旧
本田家住宅から東に2
軒先のところにある旧
家で、私の叔母の家で
もある。3年前に家を
建て替えた際、作庭の
依頼があり、コロナ禍
であったが時間をかけ
丁寧に施工した。基本
的にその現場にある使
える材料（石材、植木
など）は全て用い、一

部、新しい材料を使い施工した。三
つのしかくをつくり、既存の雪見灯
籠の笠をひっくり返して少し彫って
水盤とし、ポイントに据えてみた。
落ち着いた洪みのある庭ができた
と思う。佐藤邸のご厚意でエアコンの
効いた部屋で昼食をとり、バスに乗
り、一路、埼玉県上尾市へ。

最後は平井孝幸氏作庭の「上尾の
庭」。昨年、見学した時には、まだ園
路も完成しておらず、流れの線形も
出来ていなかったが、完成して数ヶ
月が経った庭を観ると鳥肌が立つ思
いがした。平井氏の庭は幾度か見学
させていただいたことがあったが、
この庭は平井氏の集大成だと思っ
た。低木、下草を大胆に省略した風
景、棚田を具現化した小端積みの風
景、移植せず残したただ一本のオオ
シマザクラ、満開の時に観に行き
たかったと思うと共に「やられたな
あ感」が湧き上がってきた。まだま
だ自分は先輩方の域には達していな
い、「一念通天」で行こうと心に誓
った。

最後に、暑い中、ご参加下さった
方々に感謝すると共に、今後もう
ぞ日本庭園協会東京都支部にご協力
いただけますようお願い申し上げます。
す。ありがとうございました。

（東京都支部長）

本部たより

国際活動委員会

トルコ共和国ガズィアンテプ市 代表团との面会

2023（令和5）年8月8日（火）

細野達哉ほその たつや

東京都渋谷区にある駐日トルコ共和国大使館にて、日本庭園協会とトルコ共和国ガズィアンテプ市の代表团が面会を行なった。

市の代表团からは、エルデム・ギュゼルベイ副市長ほか、都市インフラなどの局長ら数名が出席。当協会からは高橋康夫、細野達哉、大平敦子（敬称略）の3名が出席した。

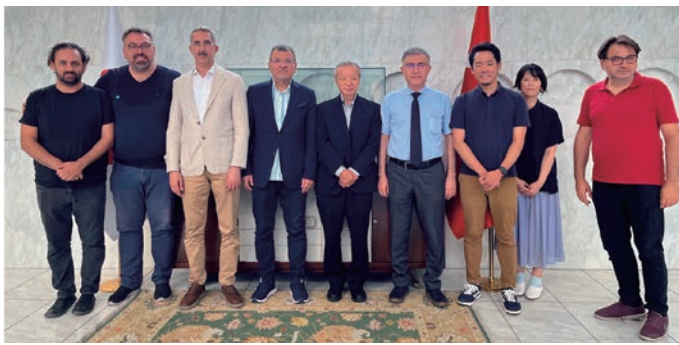
本件は、駐日トルコ大使館を介して、当市代表团から当協会へ、その訪日に合わせた面会の要望があり、実施されたものである。

ガズィアンテプ市では、今年2月に起きたトルコ・シリア地震の復興ならびに街の歴史を記念した市民公園の整備計画があり、その敷地内に日本とトルコの親善を象徴した1000㎡ほどの日本庭園の築造を検討している。今回の面会は、その計画の説明と協力の打診を主旨として行われたものである。

高橋会長は、発言の冒頭にトルコ



面会の様子。ガズィアンテプ市代表团（奥・2人目から（敬称略）セルダル・ムラット・ギュルセル（保全維持課長・博物館等担当）、エルデム・ギュゼルベイ（市長代理）、ヒュセイン・ソンメズレル（上下水道局長）、オメル・セルチュック・バズ（ヤルン建築共同代表）、ジャフェル・ユルマズ（消防課長） 撮影筆者



面会を行なったガズィアンテプ市代表团との記念写真
（細野カメラにて大使館職員撮影）

での震災被災者に対する哀悼と復興への激励の言葉を述べてその苦難に共感する姿勢を示し、続けて当協会が取り組んだ東日本大震災復興記念庭園に関する資料を代表团に渡し、その解説を通して日本の庭園に関する概説を伝えた。

その後、代表团からは日本の庭園文化と造園工事に関して、当協会からは公園計画の構想に関してお互いに質疑を交わし、およそ1時間の面会を終えた。

1890（明治23）年に起きたエルトゥールル号の悲劇をきっかけと

した日本とトルコ両国の永い友好の歴史が、今回は震災復興への願いと日本の庭園を通して、新たにカズィアンテプ市と当協会とを結びつけた。天災に向き合うと庭園というものは脆く無力に思えるが、災害国である日本の庭園文化には、より強く美しい国土をつくるための叡智と希望が備わっているように思う。

当協会としては引き続きガズィアンテプ市と交流を続け、計画の具体化に向けた助言と、協力体制の模索を行なっていく意向である。

（国際活動委員会事務局長）

技術委員会

● 伝統庭園技塾

「掛川市松ヶ岡庭園修復基礎研修会」

9月2日（土）～4日（月）、清水哲也技術委員長を塾長として開催されました。3日間で静岡県支部会員を中心に延110名を超える参加者が集い、事故もなく有意義な研修となりました。

研修では、1日目は庭園の概要を学び、2日目と3日目は主に庭園内の樹木の手入れを行いました。また、今後の整備方針策定の基礎資料とするため飛石や燈籠など石材・石造物の簡易調査も行いました。

研修内容の詳細は次号に掲載予定。

● 第14回庭園技術連続基礎講座

5月から9月の月末日曜日に、オンラインによって全5回の講座を開催しました。第1回・高見紀雄氏、第2回・伊久美和秀氏、第3回・丸山道隆氏、第4回・山田祐司氏、第5回・小泉隆一氏にご講演いただきました。

内容は随時本誌に掲載予定。

財務委員会

● 会費納入のお願い

今年度の会費納入がまだお済みでない方は、速やかな納入をお願いいたします。

創立105周年記念事業

総務委員会

臨時総会・創立105周年記念式典が10月26日(木)、清澄庭園大正記念館で開催されます。記念式典では、永年にわたって当協会に功績のあった方々の表彰が行われます。

技術委員会

みんなの緑学

10月5日(木)に「田中泰阿弥の庭園観」(講師・三鍋光夫氏)が開催されました。

10月14日(土)に「庭園協会が誕生していなければ、東京農業大学造園科学科は存在していなかった―上原敬二、龍居松之助、井下清の造園への思いと情熱」(講師・栗野隆氏)が開催されました。

両講演の内容は本誌掲載予定。

鑑賞研究委員会

清澄庭園講演会

7月9日(日)に「井下清らの技術者集団が作り上げた公共の日本庭園としての清澄庭園の文化的・技術的価値」(講師・高橋康夫氏)と「清澄庭園の現状と課題」(講師・中山なつ希氏)が開催されました。

講演内容は、冊子『清澄庭園を知る(仮)』に掲載。

庭園鑑賞会

9月16日(土)〜17日(日)、「東日本大震災復興記念庭園鑑賞会」が開催されました。

1日目の午前は「竹亭大和別邸」の庭園鑑賞と昼食、午後は「東日本大震災復興記念庭園」の見学。参加者43名は、設計者横山英悦氏の説明を受けながらの庭園散策と加藤精一総務委員長の前茶点前のおもてなしを愉しみました。同日夜刻、宮城県支部主催の「東日本大震災復興庭園5周年記念祝賀会」が開催されました。2日目、庭の体験型展示場「庭正パーク」の見学後、仙台駅にて散会。

広報委員会

冊子『清澄庭園を知る(仮)』を編集集中。本誌は、創立百周年記念事業・清澄庭園再評価プロジェクト「清澄庭園を国指定名勝にする」と題して開催された全6回の講演会(講師・龍居竹之介氏・原徳三氏・内田青蔵氏・松島義章氏・亀山章氏)と本年度開催の鑑賞研究委員会主催の「清澄庭園講演会」全2回の講演会(講師・高橋康夫氏、中山なつ希氏)の講演録です。年内を目処に発行予定。

新刊紹介

『江戸大名庭園は挑む―「名園」の復活そして都市庭園の未来』

菊池正芳著

本書は、当協会会員の菊池正芳氏が、長年にわたり東京都において緑地、公園行政に関わられた中で、特に大名庭園復元の取組みを多くの人に知ってもらいたいとの思いから纏められた一冊です。内容にもある平成元年の「東京都における文化財庭園の保存・復元・管理等に関する専門委員会」では、龍居竹之介名誉会長が当初から委員を務め、また、庭園ガイドボランティアの取組みには高橋康夫会長が立ち上げから関わっており、当協会にとっても縁の深い内容が盛り込まれています。タイトルから著者の熱い思いが伝わる書。ご一読をお薦めします。



『江戸大名庭園は挑む―「名園」の復活そして都市庭園の未来』
菊池正芳 著

新入会員・氏名(住所)

(2023(令和5)年7月1日から9月30日)
若尾千尋(東京都)(敬称略)

編集後記

★前号から編集校正に事務局の大平敦子さんが参加。最強助っ人です。

編集担当…小沼康子/内田均/中山なつ希
／酒井和佳子
本文デザイン…由比まゆみ

114号				113号				112号				111号			
巻頭言	便り	講座	講座	巻頭言	便り	報告	報告	巻頭言	便り	追悼	見学会	講座	講座	報告	巻頭言
上原敬二先生と造園連半世紀を祝う	東京支部・本部のお知らせ	第14回 庭園技術連続基礎講座 庭園技術連続基礎講座 庭園技術連続基礎講座	第14回 庭園技術連続基礎講座 庭園技術連続基礎講座 庭園技術連続基礎講座	国指定名勝 貞観園	本部のお知らせ	新役員紹介	本部・支部のお知らせ	私と日本庭園協会	みんなの緑学「長尾欽弥とよね」その人物と本宅・別荘の庭園をめぐるその1 世田谷富雨荘	清澄庭園鑑賞会・庭園を知る	国際活動委員会 事業報告	本部・支部共催「京都庭園鑑賞研修会」	新役員紹介	支部より	第40回全国緑化フェア「未来の杜 せんだい2023(Fuel Green)」
内山真文氏	第31回佐藤国際交流賞受賞	第31回佐藤国際交流賞受賞	第31回佐藤国際交流賞受賞	第31回佐藤国際交流賞受賞	第31回佐藤国際交流賞受賞	第31回佐藤国際交流賞受賞	第31回佐藤国際交流賞受賞	第31回佐藤国際交流賞受賞	第31回佐藤国際交流賞受賞	第31回佐藤国際交流賞受賞	第31回佐藤国際交流賞受賞	第31回佐藤国際交流賞受賞	第31回佐藤国際交流賞受賞	第31回佐藤国際交流賞受賞	第31回佐藤国際交流賞受賞
神田松太郎	加藤映	高見紀雄	龍居竹之介	加藤映	高見紀雄	龍居竹之介	加藤映	高見紀雄	龍居竹之介	加藤映	高見紀雄	龍居竹之介	加藤映	高見紀雄	龍居竹之介

2023(令和5)年総目次